

解 説



(株)松浦機械製作所の技術開発の活動 (2)

Activities of Technology Development by Matsuura Machinery Corporation (2)

松浦 勝俊*

Katsutoshi Matsuura

神戸 久信*

Hisanobu Kanto

天谷 浩一*

Koichi Amaya

慈道 圭司*

Keishi Jido

加藤 敏彦*

Toshibiko Kato

武澤 泰則*

Yasunori Takezawa

山口 浩幸*

Hiroyuki Yamaguchi

木村 文武*

Fumitake Kimura

山本 和義*

Kazuyoshi Yamamoto

吉田 光慶*

Mitsuyoshi Yoshida

青木 規泰*

Noriyasu Aoki

市村 誠*

Makoto Ichimura

清水 裕浩*

Yasubiro Shimizu

堀口 久介*

Kyusuke Horiguchi

前田 敏男*

Toshio Maeda

(司会) 上村 誠*

Makoto Uemura

3. 社内展開期 (2001 ~ 2005 年)

3.1 具体的な展開のための活動

松浦 業務命令として、定期的にセミナーへの技術者の参加、大会や研究会への参加を行って行く中で、次第に積極的に参加する者が増加していった。続いて管理職が理解を深め、若手の中から自らやろうという者が社内が発生してきた。事例の数は部門ごとに少しずつ増加はしたが、指導者が絶対的に不足している状態であるため、事例進行の遅さ、理解レベルのギャップ差が多く見られた。

神戸 現場のモノづくりは、開発と製造が一体化したスピードと多様性が要求されており、われわれが今までに設計や製造した経験の中で蓄積してきた知識や身に付けた勘によるモノづくり時代は終わったと感じざるを得ない。しかし、過去の経験やそれを得た技術は決して無駄ではなく、会社の財産と言えるのではないだろうか。それらの蓄積が心と技という形となって会社の強みになっているのは紛れもない事実だ。

新興国のメーカーの技術力が向上したことによる競争の激化が続く中、情勢が変わっても変わらなくても、われわれ企業が国内で生産を続けるためには、

過去のモノづくりの経験を生かした上で、設計と現場間のスピードを上げた製造、生産技術をより高めた製造現場に変えていくことが必要ではないだろうか。そのためにまず今までの固定観念から脱却し企業の体質を改善し、製造方法の見直しを図る必要がある。その場合過去の経験から得た開発、製造のノウハウを持ち続けた上で、新しい方法を見つけ出し、より素早く商品展開に反映しなければならない。

従来は市場調査、開発、試作、検証、評価を踏んだ後ようやく市場での販売に至るので時間を要したが、これからは現場が培った製造技術、品質技術を論理的に標準化し、短期間で試作品を作り製品化し、商品をより速く市場へ送り出す必要があると思う。変化していく消費者のニーズにその都度、迅速に応え、必要とされる商品を一刻も早く届けることが、企業の使命の一つではないだろうか。そのために必要な経営体質の強化を図るために、品質工学の活用は必須となってくるだろう。工作機械のように精緻なモノづくりにも同じような商品化工程が当てはまる。

モノづくりの現場では機械化されない伝承に頼る作業工程が数多くある。標準化が難しいとされている工程または作業の現状を分析、解析、検証し、製品の品質管理ができるように整理し、合理性が高い理論方法である品質工学で、そのモノづくりに応じ

* (株)松浦機械製作所